

知礼の『妙宗鈔』における約心観仏と即心念仏

張 成 林

四明知礼(九六〇—一〇二八)は『観経疏妙宗鈔』において天台止観の原理を観経に適用し、観経の十六観法はすべて一心三観をもつて一境三諦を照らすものと解釈した。しかし観経の観法と般舟三昧とにおける一心三観は、直接自己の一念を観じて本性仏を顕す一行三昧等の通途の観心法門とは違って、専ら西方の弥陀依正の境を観じ、これに託して心性本具の弥陀依正を顕す円妙絶待の観であると説いた。従って彼は観経の経題における観仏と天台観経疏に説く「心観為宗」とを会通し、観仏と心観とは相違するものではないと主張し、心観について新たな解釈を加えて「約心観仏」または「即心念仏」と称した。この二語は知礼の観仏思想の特色を端的に表現した言葉といえるが、彼はなぜ「約心観仏」「即心念仏」という異なる表現を用いたのか。本稿では、「約心観仏」と「即心念仏」とのそれぞれの語意を分析することによって、両者の異同について検討してみたい。

知礼は円教の初心行者の立場で、観経の観法は所観の境を

行者の内心ではなく、外境たる弥陀依正に定めて観ずるが故に、内外二観に分判すれば外観に相当すると説いた。知礼によれば、内外の義は迷事(陰妄)によって分立されるのであって、性具の理や妙境とかによって立てられるのではない。しかも所観の境を定める際には、未だ妙境にならず、実際の観照の義もないという⁽¹⁾。従って観経の観法を外観と判じた後に、更に観法の難易について論じる必要があった。

若論難易、今須從易。法華玄云、仏法太高、衆生太広、初心為難。心仏衆生三無差別、観心則易。今此観法非但観仏、乃擲心観、就下顕高。雖修仏観不名為難。(大正三七、一九七下)

知礼は観経の観法の難易を論ずれば易修に従うべきとし、『法華玄義』の「三法無差、観心則易」の説に基づき、観経の観法は心法の易修性に従うべきと主張する。つまり観経の観法はただ仏を観ずるのではなく、心性に拠って観ずるのであるから、凡下の心に就いて高聖の仏が顕れ、仏観を修するけれども難行ではない。ここで「擲心観」の「擲」字には心仏衆生の

三法の中でいずれに拠つて観ずるべきなのか、という意味があると思う。因みに「拠乎心性、觀彼依正、依正可彰。託彼依正、觀於心性、心性易発。」(大正三七、一九五中)という文も心法の易修性に從つて述べたものといえる。従つて觀經の觀仏を「拠心觀仏」と呼んでも差し支えないだろう。

更に知礼は心法の近要義によつて約心觀仏論を展開する。

以一切法一一皆具一切法故。是故今家立於唯色唯香等義。若其然者、何故經論多以「心為諸法總、立觀境邪。良以若觀生仏等境、事既隔異、能所難忘。觀心法者、近而復要。」①既是能造、具義易彰。②又即能觀而為所照、易絕念故。妙玄云、三無差別、觀心則易。縱觀他境亦須約心。此經正當約心觀仏也。(大正三七、一九八上)

一切法の一々は皆一切法を性具しているから、唯色唯香の義が立てられる。そうであるならば、なぜ經論の多くは一心を諸法の總として觀と境を立てるのであるかという質問に、知礼は心法が「近而復要」であるからと説明する。つまり諸法皆總(『指要鈔』に説く)であるけれども、心法の近要性に從つて一心(一念心、己心)を諸法の總として觀と境とを立てるのであるという。心法の近要について彼は二つの義によつて説明する。①心法は能造であるから、性具の義が容易に顯れる。②能觀の心に即して、所照(所觀の境)も心であるから、容易に能所分別の念を超えることができる。

なお知礼は『妙宗鈔』においてわが心性は法界に周遍し、

知礼の『妙宗鈔』における約心觀仏と即心念仏(張)

一切法を變造し、一切法を性具するとし、弥陀依正も心性の所具所造であつて、心外の法ではないと示した。しかも「能造因緣及所造法、皆悉當處全是心性。」(大正三七、一九五中)といつて、一切法(弥陀依正)は當相當處において全くわが心性そのものであるという。よつて能觀も己心であり、所觀の弥陀依正の境も己心(心性絶待)となるのである。つまり己心を諸法の總として觀と境を立てるが故に、外境たる弥陀依正を觀ずるけれども、心外の弥陀依正を觀ずるのではない。だから再度「三無差別、觀心則易。」の説に基づき、觀心の易修性に從つて、たとえ他境を觀じても心性に約すべきと強調し、觀經の觀法を約心觀仏と判じた。つまり内境たる自己の内心を觀ずる場合のみならず、内心以外の他境を觀ずる場合でも心性に約して觀ずるべきと主張した。觀經の觀法は正に心法の易修性に從つて他境(外境)たる弥陀依正を觀ずるが故に、難行の約仏觀仏でもなく、約生觀仏でもない、易行の約心觀仏なのである。それ故、約心の「約」には前述の拠心觀仏における「拠」意と同じく、心仏衆生の三法の中でいづれに從つて觀を修するべきなのか、という意味があると考えられる。日本近代天台宗学僧である大宝守脱(一八〇四—一八八四)は約心の「約」の意は依・拠・就・從等の義に通じると指摘している(天台宗全書二、二二下)。筆者はこの外にも更に以の義、取の義に通じると思う。ともあれ約心觀仏の

「約」と即心念仏の「即」は元々関連性がないといえる。なお約心觀仏は弥陀依正に託して觀するのであるから、「約心」という場合には託仏の義も兼ねているといつてよからう。⁽²⁾けれども約心觀仏における「約」の意は初心行者が弥陀依正を觀するに当たつて、心仏衆生の三法の中でいずれに従うべきなのか、ということに重きが置かれていふと考えられる。なお「今約唯心、觀仏依正。」（大正三七、一九八上）と述べているので、約心の「心」は唯心（心性絶待）を指すと考えられる。つまり心法の易修性に従つて、己心（真心ではない）を諸法の總とした万法唯心の觀解に約して他境たる弥陀依正を觀するが故に、約心觀仏と称したのである。

さて、知礼は『妙宗鈔』の序文で「願共有情。即心念仏。乃此鈔所以作也。」（大正三七、一九五上）と述べ、即心念仏の觀行を提唱した。では、彼はなぜ觀經の妙觀を解釈するに当たつて、「約心觀仏」・「即心念仏」という異なる表現を用いたのか。知礼は觀經の第八像觀に説く「是心作仏、是心是仏」の文に基づいて即心念仏の義を示している。

故以心仏同体名心是仏。觀生彼果名心作仏。

意在即心念仏及令慕果修因。（大正三七、二二〇下）

心仏同体（心仏一体）であるが故に心是仏といい、觀によつて彼の果仏を顯すが故に心作仏というのである。そしてこうした作是の原理を説く目的は、即心念仏の行を修行せしめる

ためであると説明する。ここで即心念仏とは、心仏一体の理によつて仏を觀するものであることがわかる。「三法無差、觀心則易」の説に基づき、心法の易修性に従つた約心觀仏と即心念仏とが区別される最大の特徴といへば、即心念仏は心仏一体を強調するところにあると考えられる。とはいへ、天台で心性に基づいて觀する場合には、皆心法の易修性に従うという意があるので、即心念仏も約心觀仏と同様に心法の易修性に従つた觀法と見なすべきであらう。

では、即心念仏における心仏一体の意を如何に理解すべきなのか。知礼は觀仏と心觀との義を会通して相違するものではないと示し、心仏一体を明らかにした。

良以円解全異小乘。小味唯心仏従外有。是故心仏其体不同。大乘行人、知我一心具諸仏性、託境修觀、仏相乃彰。今觀弥陀依正為縁、重乎心性、心性所具極樂依正。由熏發生。心具而生。豈離心性。全心是仏全仏是心、終日觀心終日觀仏。（大正三七、一九七下）

小乗の行人は唯心の道理を知らず、仏が心外にあると理解するので、心と仏とは一体ではない。しかし大乘の行人はわが一心に諸仏を性具しているから、境に託して觀を修すれば仏相が顯れてくるということを知っている。よつて弥陀依正を觀するのを縁として心性に熏ずれば、心性所具の極樂依正が熏修によつて發生すると説明し、心性本具の弥陀依正が生ずるのであるから、心性を離れることはないと説示する。従つ

て心仏一体を説いて観仏はそのまま観心であると断言した。つまり知礼は天台性具の理に基づいて心仏一体を説き、所観の弥陀依正は心性を離れたものではないと主張した。なお知礼は「其体不二、方名為即。」（大正三七、二〇二下）と述べ、一体不二であるから「即」と名づけられるのであると示した。従って即心念仏の「即」は心仏不二（心仏一体）の義であるということが示唆される。つまり外境たる所観の弥陀依正は心性本具の法であって心外の法ではないということから、心仏不二というのである。よって即心念仏の「即」は、心仏不二を意味し、しかも心仏不二という場合には自ずと心性本具の義と託境修観の義とが含まれていると考えられる。そして『妙宗鈔』に「即心観仏、託境顯性」（大正三七、二〇三中）とあるように、即心観仏にも託仏の義があるので、即心観仏も約心観仏と同じく外観に相当するのである。

なお、知礼は「今之妙観。即於染心観四淨土。」（大正三七、一九六中）と述べ、観經の妙観は染心に即して四淨土を観ずるのであるという。よって、即心の「心」は染心（煩惱心・妄心）であることが知られる。また、『妙宗鈔』の内容による限り、即心念仏の「念」は主に観念の念を指すのであって、称念の念の意は稀薄であると思われる⁽³⁾。

以上本稿では、「約心観仏」と「即心念仏」との異同について考察してきた。その結果、約心観仏と即心念仏とは、い

ずれも心法の易修性に従って、外境たる弥陀依正を觀じ、これに託して心性本具の弥陀依正を顯す円教の初心行者の円妙観であることがわかった。そして約心観仏と即心念仏との語意を分析することによって、それぞれが強調する点も明らかになった。約心観仏は心法の易修性に従って、己心を諸法の総とした万法唯心の觀解に約して外境たる弥陀依正を觀ずるということに重きを置くのに対し、即心念仏は外境たる所観の弥陀依正は心性本具の法であって心外の法ではないということから、心仏不二を強調することに重きを置くのである。

1 拙稿「四明知礼の約心観仏説における『外観』理解——『四明十義書』の外観義との関連において——」（『印度学仏教学研究』五六卷一号、平成一九年）参照。 2 『浄土境観要門』には

「約心就託仏辺説。即心就本具辺論、由具故即也。各举一義意必双含也。」（大正四七、二九〇中）とある。 3 妙宗鈔では

十六觀法の全てが妙観であるべきとしたため、下下品の称名念仏における定心をもかつて妙観を修した宿善によって成就されると解釈した。即心念仏の「念」について、守脱は「念仏之念、正在観念、傍兼口称。」（天台宗全書二、二二）という見解を示している。

〈キーワード〉 心性本具、易修、近要、諸法皆総、心仏不二

（佛教大学大学院）